

流行を追わず、綿・麻帆布にこだわり続ける。 手仕事が生むかばんの魅力は時代を超える。



<http://www.ichizawa.co.jp/>

株式会社一澤信三郎帆布

連日にぎわいに包まれる

「かばん」に思いを込めたお店

「良質な天然帆布を使って、丁寧な手仕事をする」「修理を引き受けること」「京都で製造・販売すること」。この三つにこだわって、ぬくもり豊かな帆布から、生（き）成（な）り（な）の魅力をまとった「かばん」を作りあげる。

往時の大工など職人たちが愛用した道具袋。牛乳瓶を持ち運ぶ配達かばん。水屋の必需品だった水袋。どれも市井に生きた人々の生業（なりわい）と共にあった日用品の形と心を受け継ぐものばかり。だから、厚くて丈夫な帆布が用いられ、長年の使用に耐える堅牢（けんろう）さを誇っている。装飾性が少ないシンプルでこなやかなので、いつまでも飽き（あ）が（あ）来（き）ない。

世代を超えて愛される一澤信三郎帆布製のかばん。その魅力に惹かれた大勢

長年愛され続けるシンプルで飽きの来ないデザイン

の人たちで、お店は今日もにぎわいに包まれる。入口の暖簾（のれん）には、愛用者の永六輔氏が筆を執った「砲（かばん）」の文字が涼風に揺れる。革製の「鞆（かばん）」ではなく布製のかばんを表す造字が、しなやかだが頑丈な「一澤信三郎製かばん」の持ち味を表している。

初代の一澤喜兵衛氏が帆布袋を作り始めたのは明治38（1905）年。それから数えて昨年創業110周年を迎えた。この年を記念して、ハサミや木槌、ミシンといった道具類が散りばめられた新しい柄が発表された。手仕事のかばん作りに込めるプライドが伝わってくる。

見えない所にまで配慮をめぐらせ 使う人への思いやりで仕上げる

帆布の素材は綿と麻。納得できる生地を手当するため、技に秀でた織屋さんに特別に織ってもらい、馴染みの染め

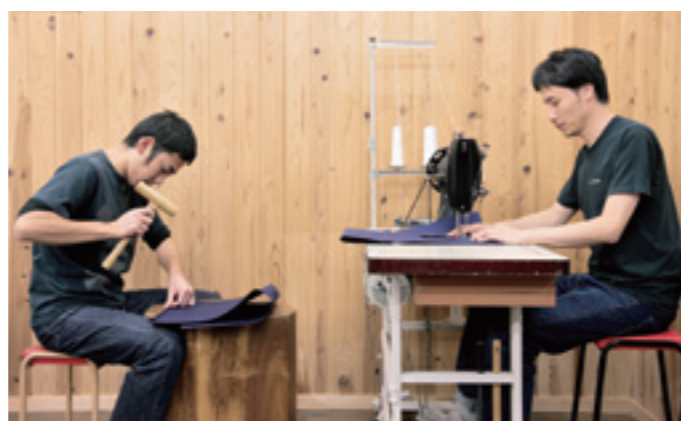
屋さんに染めてもらう。手仕事の工房が集まる京都ならではの。

工房で働く職人は現在70人ほど。若い人や女性の姿が目立つ。ミシンを操るベテランと、金具を取り付けたりする下職（したしやく）がチームを組んで作業するが、マニュアルはなく、「いかに良いかばんを作るか」は職人たちの知恵と工夫にゆだねられる。それぞれのチームが分業ではなく、仕上げまで一貫して行うため、「作りたいと思っただかばん」はいつでもすぐに作れるし、50年前のものでも即座に再現できる。

分業制にはない「クリエイティブな喜び」を得られるためか、職人たちの向上心は高く、外から見えない所にまで配慮をめぐらせている。「丈夫で長持ちする耐久性」を生み出す一方、「こうすれば使い勝手がいい」と使う人への思いやりを注ぎ、いつまでも「愛されるかばん」に仕上げていく。

「70年代に若者向け雑誌で取り上げられたのを機に、私たちのかばんは注目されるようになった。『過性の流行に終わらなかつたのは、時代の変化を超える普遍的な魅力と、かばんの本質である『使いやすいと丈夫さ』を持っていたから』と思う。流行を追うことはせず、ただ黙々と昔ながらの流儀で、丁寧にかばんを作り続けてきただけだ。四代目の一澤信三郎社長は気負うことがない。

「スマートフォン用のポケットがある」と便利」。そんなお客さまのひと言が新しいデザインのヒントになった。職人がアイデアを持ち寄り、自由に試作品を作っては実際に使ってみるのが、ここ独自の商品開発スタイル。多品種小ロットに適したものづくりの工房だからこそ、こんな柔軟な試みができる。



マニュアルはなく、職人たちは知恵と工夫をこらしかばんを仕上げていく



プレミアム感を引き出す、京都東山にある唯一の店舗

ミュージアムグッズをはじめ 別注品の人気も高まる

この持ち味を生かす形で昔から「別注品」も手掛けてきた。老舗の暖簾や作業用の前掛け、競走馬のゼッケンなど意外なものも作ってきたが、最近は企業の周年記念などのプレミアムグッズや、博物

館からミュージアムグッズの依頼も多い。また、外国人の来店が増え、海外から記念品の注文などインバウンドの波も押し寄せつつある。

販売量拡大の好期といえるが、当然、一澤社長はそうは考えない。もとより量産には向かない手仕事を堅持して、「末長く愛されるかばん作りを続けるだけ」

とほほ笑む。

「職人が機嫌よく働いてかばんを作ってお客さまに満足していただくこと以外に、私たちが求めるものはない。あわてて時代に合わせることはないけど、時代の風やにおいを感じることは大事。時代に流されず、今後もうちらしい道を行きたい」

お客さまと近い距離が保てる

製販一体スタイルを守り続ける

「一澤信三郎製のかばん」はすでに、強いブランド力を持っているのだが、一澤社長ご本人は「ブランドを意識したこともないし、マーケティングとも縁がない」との姿勢を貫く。手仕事へのこだわりが作ることでできる量を定めるため、どれだけ人気が高まっても、多店舗化や百貨店等への出店を考えたことはない。この無欲さも好感されたのか、「東山のお店に足を運ばないと買えない」というプレミアム感がファンをさらに増やしているのだが、それを一澤社長が意図していたわけでもない。

「大量生産・大量消費に適した製販分離が進んだことで、作り手と買い手の距離が遠くなった。その流れに抗い、私たちはお客さまの顔が見える距離を保

Profile

株式会社一澤信三郎帆布

- 本社/京都市東山区東大路三条下ル進之町590
- 創業/1905年
- 資本金/1,000万円
- 従業員数/80名
- 事業内容/帆布製かばんの製造・販売



代表取締役社長
一澤 信三郎氏

Voice

私たちがかばんに付けるタグはブランドではなく製造責任。生涯の友としてご愛用いただくため、販売後何十年たとうともできる限り修理を承っています。目先の利と効率ばかりを求めない「自然体の商い」を今後も続けていきます。